

“The Bride Comes to Yellow Sky” における イエロー・スカイの住人の描写

The Descriptions of the Residents of Yellow Sky in “The Bride Comes to Yellow Sky”

古 賀 元 章

Motoaki KOGA
英語教育講座

(平成24年10月1日受理)

はじめに

アメリカの小説家 Stephen Crane (1871-1900) の “The Bride Comes to Yellow Sky” は、4章の構成で書かれた1896年作の短編小説である。第1章は、東部からの急行列車が西部へ向かう描写である。そこでは、一組の幸せそうな新婚夫婦が紹介される。彼らは、新郎の故郷である西部のイエロー・スカイ（架空の町）で下車する予定である。列車の進行方向は、われわれ読者を西部の町へと道案内する役割をする。第2章の中心は、新婚夫婦の目的地に存在する酒場である。そこにはバーテンと客がいる。若者がその場所に現れて、これからのストーリーが展開される出来事をもたらす。それは、酒に酔った荒くれ者が近づいていることである。われわれは、酒場の住人と同じような気持ちで、厄介者の到来をじっと待ち構える。第3章は、われわれが予期するように、荒くれ者が登場する。彼は酒場や友人の家に拳銃で威嚇するが、その仕業は中途半端に終わる。これら2章は、われわれがこの町の現状を知るための伏線となっている。第4章は、あげくの果てに、荒くれ者が仇敵である新郎の家へ向かい、彼と決闘する光景を示す。ラストシーンはこのならず者が敗北する姿を伝える。

このように、“The Bride Comes to Yellow Sky” は町の住人の言動に焦点を当てている。その背景には、大学生のときのクレインの経験が考えられる。1891年にシラキュース大学 (Syracuse University) に入学したとき、彼は近くに住む売春婦や犯罪者が自分たちの生活を享受するだけの現実に興味を示していた。その頃の彼は、アメリカの作家の Hamlin Garland (1860-1940) の夏季の文芸講演を聴講する機会を得る。ガーランドの講演の拠り所は、現実を強調して描写するアメリカの作家の William Dean Howells (1837-1920) の自然主義¹であった。ハウエルズの現実重視の手法に影響を受けて、クレインは自作の短編小説で町の人々の生活風景を題材として取り入れたのだと言える。

そうすると、“The Bride Comes to Yellow Sky” では西部の町に住む人々が東部出身のクレイン²のどのような人間理解のもとで描かれているのであろうか。本稿の狙いはその点を明らかにすることである。その際、彼らの言動に注意を払い、また、当時のクレインの西部への取材旅行の体験も参考にしたい。

THE great Pullman was whirling onward with such dignity of motion that a glance from the window seemed simply to prove that the plains of Texas were pouring eastward. Vast flats of green grass, dull-hued spaces of mesquit and cactus, little groups of frame houses, woods of light and tender trees, all were sweeping into the east, sweeping over the horizon, a precipice. (169)³

アリフォルニア行きの豪華な客車がアメリカの東部から西部へと疾走する。その疾走に伴って、車窓から一瞥されるのはアメリカ南部のテキサス州である。そこでの光景は、平坦な緑の草原、くすんだ色合いのメスキート（マメ科の低木）、サボテン、木造家屋の小さな集まり、弱々しい未熟な木の森である。客車が前進するたび、近づく西部での索漠たるリアルな景色は、まるで断崖から落ちるかのように、東の方の地平線へと飲み込まれるという。

このような冒頭の場合は、きらびやかな客車がわれわれを西部の世界へ案内する役割をしている。われわれが想像するのは、この客車の進行方向から察して、西部が東部の文明の影響を被ることであろう。その影響は、第4章（Bernard 438）ではなく、第1章から次第に明らかになるのである。

そこで、東部と西部とのかかわりがこの短編小説にどのように反映されているのかに注意を払って、これから描かれるイエロー・スカイの住人を考察することにする。そのため、冒頭続くストーリーに登場する人物たちの言動を検討してみたい。

第1章では、一組の新婚夫婦が、テキサス州の都市サン・アントニオ（San Antonio）で客車に乗り込む。彼らは、イエロー・スカイ出身の Jack Potter とこの都市に住んでいた花嫁（この短編小説では名前が明記されていない）で、当地で結婚式を挙げて新郎の出身地に向かっている。車中における彼らの描写を見てみよう。新郎のポッターも新婦も、他人の目を意識するはにかみ屋である。新婦は懷中から小さな銀時計を取り出して眺めていると、ポッターが “I bought it [the silver watch] in San Anton' from a friend of mine' ” (171) と幸せそうに言う。すると、彼女は “It's seventeen minutes past twelve' ” (171) と恥じらいながら、媚びた態度で返事する。そこには、彼らの新婚ほやほやの雰囲気を与えている。

しかし、客車が次第に故郷のイエロー・スカイへと近づくにつれて、ポッターは落ち着きを失い、新婦からの話しかけにも応える余裕がなくなる。なぜなら、この町の保安官で、人々から知られ、愛され、恐れられているとはいえ、彼は “the shadow of a deep weigh” (171) が深くのしかかっているのを感じるからである。この影が次のように説明されている。

Of course people in Yellow Sky married as it pleased them, in accordance with a general custom; but such was Potter's thought of his duty to his friends, or of their idea of his duty, or of an unspoken form which does not control men in these matters, that he felt he was heinous. He had committed an extraordinary crime. Face to face with this girl in San Antonio, and spurred by his sharp impulse, he had gone headlong over all the social hedges. At San Antonio he was like a man hidden in the dark. A knife to sever any friendly duty, any form, was easy to his hand in that remote city. But the hour of Yellow Sky — the hour of daylight — was approaching. (171-72)

町の人々は、一般の習慣（友人へ近況を連絡する義務、どのような不文律）に従って、自由な形で結婚している。しかしポッターは、友人に対する自分の義務やその逆の場合に関して、人々を拘束しない暗黙の了解があると思っていた。とはいえ、彼らに今回の結婚を知らせていなかったことが一般の習慣への違反行為であると判断して、彼は自らを犯罪人だと見なしている。サン・アントニオでの結婚は、イエロー・スカイでの一般の習慣に従順である必要がなかった。それは、この都市が西部より開けた文明、つまり、東部の影響を受けた文明を醸し出しているからである。その証拠の一端は、ポッターがこの都市で友人から買った小さな懷中時計である。したがって、東部の文明に触れた彼は新婦と一緒に、ハイカラな都市から素朴な町のイエロー・スカイへ戻ろうとしているのである。

その結果として、ポッターの心には西部の文明に対する一種の罪意識が芽生えるようになるし、新婦の心にも西部の町に来ることに対する何らかの後ろめたさが存在するようになる。“The Bride Comes to Yellow Sky” は、こうした彼らの内面描写を、“A sense of mutual guilt invaded their minds and developed a finer tenderness. They looked at each other with eyes softly aglow.” (172) と書いているし、さら

に, “But Potter often laughed the same nervous laugh; the flush upon the bridge’s face seemed quite permanent.” (172) と書き加えている。そこに認められる彼の動作の背景にあるのは, “His friends could not forgive him. Frequently he had reflected on the advisability of telling them by telegraph, but a new cowardice had been upon him. He feared to do it.” (172) という文章内容であると思われる。ポッターの神経質的な笑いは、故郷の町への自らの背信行為に伴う不安感と深くかかわっているのである。この短編小説の冒頭では、西部の土地が東部の文明にさらされることが想像された。そうすると、彼の神経質的な笑いはわれわれに、こうした現象を予知させるものであるばかりではなく、彼自身の精神的不安を取り繕うものでもあろう。同席する新婦の赤面も、ただ単に新婚の恥じらいばかりではなく、彼女自身の精神的不安も暗に表現しているであろう。

2

新婚夫婦が乗った急行列車があと 21 分でイエロー・スカイに到着するところで、場面がこの町にある酒場に移る。この酒場では、バーテン以外に、6 人の客がカウンターに坐っている。1 人は早口でべらべらと喋る新参者のセールスマン、3 人は喋る気分になれないテキサス者、残りの 2 人は口をきかない羊飼いのメキシコ人である。セールスマンがカウンターに上品なしぐさで寄りかかり、いろいろな話をしていた。そのとき、1 人の若者が開いていた戸口に現れて, “‘Scratchy Wilson’s drunk, and has turned loose with both hands.’” (174) と叫ぶ。その話を聞いたとたん、2 人のメキシコ人はグラスを置いて、酒場の裏口からそそくさと退散する。その動作から察すると、彼らは事件に巻き込まれたくないらしい。何も事情がわからないセールスマンは若者に向かって, “‘All right, old man, S’pose he has? Come in and have a drink, anyhow.’” (174) とおどけて返事するが、しんと静まり返った周囲の雰囲気になやまな事件であることを思い知らされる。バーテンはこのような酔っ払った荒くれ者の習癖に慣れているらしく、戸口の錠をおろし、これにかんぬきをかける。彼はまた、よろい戸を閉め、これにもかんぬきをかける。

セールスマンは銃撃戦が始まるのではないかとと言うと、そのまま残ったテキサス者の 1 人が “‘... there’ll be some shootin’ — some good shootin’.’” (175) と返事する。先の若者は “‘Oh, there’ll be a fight fast enough, if any one wants it. Anybody can get a fight out there in the street. There’s a fight just waiting.’” (175) と述べる。彼らは、相手の名前がスクラッチ・ウイルソンだと異口同音に話す。これらの事柄を聞いて身の安全を不安に思ったセールスマンは、相手がドアを壊して中に入ってくるかどうかを尋ねる。彼がこれまで 3 度試みたけどドアを壊せなかったことを伝えて、バーテンは新参者に, “‘But when he comes you’d better lay down on the floor, stranger. He’s dead sure to shoot at it, and a bullet may come through.’” (175) と進言する。

セールスマンは冷や汗をかきながら、次第に裏口から逃げ出したいことを発言する。それを聞いて、酒びんを持った男が親切とはいえ、有無を言わさぬ身振りで指示する。すると、彼はその指示通りに動いて、頭の高さをカウンターの線よりも低くして空箱に腰をおろす。その際、弾よけとして、装甲版に似たような亜鉛や銅の金具が見えたので、動揺する心が幾分か落ち着いた。

ここで、セールスマンの言動に注目してみたい。1 人の若者の通報で事件の発生を知って、彼は身の安全を確保しようとする。しかし彼は、よそ者なので対応策がわからず不安を覚えるが、この種の出来事に慣れた地元の人々（バーテン、テキサス者）の助言に従い、防御の身構えをすることができる。彼は、早口は別にして、われわれがイエロー・スカイの人々の生活習慣の一端を知るための道案内の役割を果たしていると言えよう。

ところで、バーテンは空箱に慌てずゆったりと座り、隣のセールスマンに荒くれ者のウイルソンについて次のようにささやく。

“‘this here Scratchy Wilson is a wonder with a gun — a perfect wonder; and when he goes on the war-trail, we hunt our holes — naturally. He’s about the last one of the old gang that used to hang out along the river here. He’s a terror when he’s drunk. When he’s sober he’s all right — kind of simple — wouldn’t hurt a fly — nicest fellow in town. But when he’s drunk — who!’” (176)

バーテンの口からこの荒くれ者の素性が紹介される。彼が酒を飲んで人が変わったように暴れ出すと、住民はかかわりを避けるため嵐が治まるを待つ。それはいつも見慣れた光景である。彼は、近くを流れるリオ・グランデ（Rio Grande）河あたりをたむろしていた悪党一味の最後の残存者であろうという。このような彼の素性は、ただ単に事実を示しているのではなく、イエロー・スカイの現在の姿を象徴するであろう。彼がしらふのときの真面目さとは打って変わって酒癖の悪いことが、皮肉にも昔の様子をとどめる町の姿を浮き彫りにする。そうした浮き彫りが町の現状をわれわれに強く印象付けるのである。

3

上の引用文の最後の“whool!”が予期させるように、まもなく遠くから、銃声と野獣の遠吠えのような声が酒場にいる人々にも聞こえてくる。そのとき、彼らはお互いを見て“Here he comes”（176）と言い、いよいよ荒くれ者の到来を待ち構える。

ついにウイルソンが登場する。彼のシャツと深靴の記述に注意を払ってみたい。えび色をしたフランネルのシャツは、ニューヨークのマンハッタン地区東部のイーストサイド（East Side）で作られたものであり、深靴は冬のニューイングランドの山腹において子供たちがそりで遊ぶときの靴である。こうした出で立ちは、彼自身にも東部の文明がすでに及んでいることを物語っている。

ウイルソンは例の酒場の戸口が目に残る。ドアはドンドンと叩かれたが、びくともしなかった。そこで彼は、歩道から拾った紙切れをドアの脇にナイフで突き刺し、道路の反対側まで行って発砲したが、紙切れに命中しなかった。自分自身をのしって立ち去った後、彼は仲のよい友だちの家に行き、酒に酔った勢いで窓に一斉射撃を浴びせる。短編小説はならず者の行動について、“The man was playing with this town; it was a toy for him.”（178）と描写している。子供の遊び心に似た喜劇的な彼の振る舞いは、日頃のうっぶんを晴らす習癖であるばかりではなく、東部の文明が進出することへのはかない抵抗も象徴するであろう。その後、ウイルソンは仇敵であるポッターの名前を思い浮かべ、彼の家へ行くことを決める。その理由は、彼と戦えばさぞかし楽しいであろうと判断したからである。

この考えがきっかけとなり、場面はポッターの家近辺へと移る。ポッターと花嫁が、足早に自宅へと歩いていた。彼らは角を曲がると、拳銃の弾を詰めているウイルソンと真正面からぶつかる。荒くれ者は、“‘Jack Potter. Don't you move a finger toward a gun just yet. Don't you move an eyelash. The time has come for me to settle with you, and I'm goin' to do it my own way, and loaf along with no interferin.’”（179）と言う。その言葉に対し、ポッターは“‘I ain't got a gun on me Scratchy.’”（179）と答える。二人の立場は対照的である。ウイルソンは拳銃を所持していて、自分のやり方で決闘をしようとする。この発言は、彼が西部のイエロー・スカイの昔ながらの慣習を維持しようとすることを暗示する。一方、拳銃を所持しないポッターの頭の中には、急行列車内の華やかな結婚式や新しい環境に関する映像（模様入りの青緑色のピロード、ピカピカの真ちゅう、銀、ガラス、照り輝く木材）が残っている。この残像は東部の文明に関連した内容である。したがって、ポッターの描写もまた、東部の文明が彼の帰郷を通してこの町に侵入していることをほのめかすのである。

ウイルソンがどうして銃を持っていないかを問いただすと、ポッターは“‘I ain't got a gun because I've just come from San Anton' with my wife. I'm married’”（180）と答える。その言葉を聞いて、彼はそばに寄り添う女性が結婚相手だと初めて気がつく。その姿が“He [Scrathy] was like a creature allowed a glimpse of another world.”（180）と書かれている。この別世界は、彼がこれまでに経験したことのない平和な家庭生活を指す。それは、荒くれ者が生きていける今までの無法地帯の世界ではなく、押し寄せている東部の文明と協調した平和な世界なのである。

この短編小説はウイルソンの言動を次のように示して終わる。

“Married!” He was not a student of chivalry; it was merely that in the presence of this foreign condition he was a simple child of the earlier plains. He picked up his starboard revolver, and, placing both weapons in their holsters, he went away. His feet made funnel-shaped tracks in the heavy sand. (180)

彼について、“The man was playing with this town; it was a toy for him.”と描写されていた。今、この描写の意図が明らかにされる。彼が暴れていたのは、ルールをきちんと守って戦う騎士道精神に劣り、子供の遊びに等しいのである。ポッターの結婚を知って、彼は愕然とし、戦う意欲をなくしてしまう。彼にできることは、拳銃を革袋におさめて立ち去るだけである。彼の両足が深い砂にじょうご形の跡を残すことは、敗北者としての姿を伝える。それはわれわれに、この西部の町が東部からどんどん進入して来る文明に抵抗することの無力さを思い知らせるのである。

イエロー・スカイという西部の町では、住人は東部の文明の影響を次第に受けながら、生活を営んでいる。そうした生活様式に抵抗する形で、ウィルソンが登場する。しかし、日頃決闘していたポッターは結婚した。それは、この保安官の相手が荒くれ者から新妻へ変わることを示唆する。それは同時に、ウィルソンが自分の喧嘩相手をなくすことを意味する。彼は失意に打ちのめされるのである。こうして、イエロー・スカイの住人の描写は、彼らが時代の流れに逆らえないことを浮き彫りにさせるのである。

おわりに

1895年1月から4か月間、クレインはアメリカ西部やメキシコシティーへ取材旅行する。この体験を通して、彼には自分の出身である東部の人々と取材先である西部の人との比較が芽生える。彼は、1895年11月5日付の手紙の中で次のように述べている。

I have always believed the western people to be much truer than the eastern people. We in the east are overcome a good deal by a detestable superficial culture which I think is the real barbarism. . . .

Garland will wring every westerner by the hand and hail him as a frank honest man. I won't. No, sir. But what I contend for is the atmosphere of the west which really is frank and honest. . . . (“To Brooks Hawkins,” *Stephen Crane: Letters* 69-70)

上述の取材旅行した体験に基づく彼の見解は3点にまとめられる。それは、①西部人が東部人よりも大変誠実である、②彼の生まれ育った東部が野蛮な嫌悪すべき表層文化に感染している、③西武の雰囲気がとても素朴で正直である、という見解だと言える。②を除いた他の2点⁴が西部のイエロー・スカイに住む人々の言動に反映されている。

では、クレインが①と③を重視する意図は何であろうか。それを推し量る糸口は、“The Bride Comes to Yellow Sky”の脱稿と同じ頃に書いた次のような彼の手紙の内容であろう。

I understand that a man is born into the world with his own pair of eyes, and he is not at all responsible for his vision — he is merely responsible for his quality of personal honesty. To keep close to this personal honesty is my supreme ambition. There is a sublime egotism in talking of honesty. I, however, do not say that I am honest. I merely say that I am as nearly honest as a weak mental machinery will allow. This aim in life struck me as being the only thing worth while. A man is sure to fail at it, but there is something in the failure. (“To Joseph O’Conner, 1898?” *Stephen Crane: An Omnibus* 680)

彼が注目するのは、人間の特性としての誠実さを探究することである。その探究が彼の取材旅行の目的であったと思われる。その成果として、1898年の小説が生まれている。上の手紙の末尾の文章内容が敗北者としてのウィルソンの姿に投影されている。その姿から読み取れるのは、東部の人々に欠けている人間の誠実さである。ウィルソンの荒くれた言動は、こうした誠実さを伝えようとする逆説的な手管なのである。その意味で、西部の人々が住むイエロー・スカイの描写は、東部出身のクレインが人間の誠実さを発見した痕跡を色濃く反映させたものなのである。

このように考えると、クレインの現実重視の手法は、ただ単にイエロー・スカイの住人をリアルに書き留めることではない。そこには、人間の誠実さが存在することを看過すべきではないであろう。

注

1. 自然主義については、下記の解説を参照。
「文学で、理想化を行わず、醜悪・瑣末なものを忌まず、現実をただあるがままに写しとることを本旨とする立場。」(『広辞苑 第6版』1234)
2. 彼はニュージャージー州の都市ニューアーク (Newark) で生まれている。
3. “The Bride Comes to Yellow Sky” からの引用はすべて *Great Short Works of Stephen Crane* による。括弧内の数字はこの短編集からの頁を表す。
4. 他の2点の論考については、拙稿「“The Blue Hotel” におけるスウェーデン人の奇抜な言動」を参照。

引用文献

- Crane, Stephen. *Stephen Crane: Letters*. Ed. R. W. Stallman and Lillian Gilkes. New York: New York UP, 1960.
- . *Stephen Crane: An Omnibus*. Ed. R. W. Stallman. New York: Alfred A. Knopf, 1961.
- . “The Bride Comes to Yellow Sky.” *Great Short Works of Stephen Crane*. New York: Harper and Row, 1965. 169-180.
- Bernard, Kenneth. “‘The Bride Comes to Yellow Sky’: History as Elegy.” *Stephen Crane’s Career: Perspectives and Evaluations*. Ed. Thomas A. Gullason. New York: New York UP, 1972. 435-39.
- 古賀元章. 「“The Blue Hotel” におけるスウェーデン人の奇抜な言動」『言語文化学会論集』37(2011): 111-21.
- 新村出編. 『広辞苑 第6版』. 1955. 東京: 岩波書店, 2008.